

マラヤ大学オンライン研修 体験報告書(2023 年春)

SoSHIP

(Social Science and Humanities Immersion Programme)

医学部 3 年 鈴木穂香
農学部 2 年 津田太朗
文学部 1 年 溝口莉子
法学部 1 年 大泉 結
法学部 1 年 工藤晴斐
農学部 1 年 佐藤優希
農学部 1 年 鈴木彩伽

目次

1.マラヤ大学の紹介	P.3
2.プログラムの概要	P.3
(1)プログラムスケジュール	P.3
(2)授業科目	P.5
(3)アクティビティとセレモニー	P.7
3.プログラムのハイライト	P.10
専門的な知識を分かりやすく説明すること（医学部3年 鈴木穂香）	P.10
現地バディとの交流（農学部2年 津田太朗）	P.11
日本視点と海外視点の比較（文学部1年 溝口莉子）	P.12
英語を話すことへの意識の変化（法学部1年 大泉結）	P.13
異なる視点からの歴史観と議論（法学部1年 工藤晴斐）	P.15
他国を知ることで見えた日本（農学部1年 佐藤優希）	P.16
授業形式とジェンダー問題（農学部1年 鈴木彩伽）	P.18
4.体験・学習効果	P.19
SoSHIPを通して「自分」を知る（医学部3年 鈴木穂香）	P.19
知識・経験の獲得と心理的側面での成長（農学部2年 津田太朗）	P.21
迷ったらまずチャレンジを（文学部1年 溝口莉子）	P.24

現地留学と変わらない成果（法学部 1 年 大泉結）	P.26
長期留学に向けた成長（法学部 1 年 工藤晴斐）	P.29
興味を行動に（農学部 1 年 佐藤優希）	P.32
英語を使うということ（農学部 1 年 鈴木彩伽）	P.34

1. マラヤ大学の紹介

マラヤ大学 (Universiti Malaya、UM) は、首都クアラルンプールの南西に位置する、マレーシアで最初に設立された大学である。また、マレーシア最高峰の大学でもあり、QS アジア大学ランキング 2022 では 7 位、QS 世界大学ランキング 2023 では 70 位にランクインした。17 の学部があり、学部生と大学院生を合わせると 27,000 人以上が在籍している。大学には、12 軒の全寮制カレッジ、オリンピックサイズのスイミングプール、リンバ・イルム植物園、フルコースのランニングトラックがある UM アリーナ、博物館、スポーツ施設などがあり、キャンパスの広さは 922 エーカーにも及ぶ。「A global university impacting the world」というビジョンを掲げており、多様な民族の学生が集まる国際色豊かな大学である。

2.プログラムの概要

(1)プログラムスケジュール

SoSHIP(Social Sciences and Humanities Immersion Programme) はマラヤ大学の主催する3週間のオンライン留学プログラムである。このプログラムでは、東南アジアの学生と共に社会科学系科目を学び、その中で国際教養を身に付けることができる。月曜日から金曜日に2時間の授業が2コマずつあり、火曜日と木曜日、および土曜日に1時間半~2時間の Virtual Activities があった。プログラムの主なスケジュールを次頁に示す。授業はマラヤ大学の講師が行い、使用言語は英語である。

今回の SoSHIP では、Malaysian Studies、Gender Studies、Adolescence Psychology、Politics and International Relations の4つの授業が必修科目だった。事前のアンケートで自分の興味のある授業を4つ希望し、全体の結果を踏まえて必修科目が決定された。以前の SoSHIP のように選択科目はなく、皆で同じ授業を受けていた。時差については、マレーシアが1時間遅く、プログラムのスケジュール表や現地のバディとのやりとりでは、マレーシア時間が使用されているため、時間管理には注意が必要である。授業は日本時間で10時~12時、12時30分~14時30分であったため、昼食時間は各自で工夫する必要がある。また、日本人学生2名に対して現地学生1名がバディとして割り当てられており、授業やイベントを一緒に行う。日本人学生2名に関しては、現地に留学している日本人学生とオンライン留学の日本人学生がペアになる場合もある。授業や宿題

に関する質問など、困ったことがあれば、バディに相談すると親身に対応してくれる。

また、宿題の期限やテストが近いと、リマインドしてくれたり、気にかけてくれたりと、

助けられる場面が多かった。

WEEK ONE

Day	Time	08.00 - 09.00	9.00 - 10.00	10.00 - 11.00	11.00 - 11.30	11.30 - 12.30	12.30 - 01.30	13.30 - 14.30	14.30 - 15.30	15.30 - 16.30	16.30 - 17.30
Monday	13 Feb 2023	Breakfast	Program Briefing and ELPT		Break	Campus Tour		Lunch	Virtual Activities with i-Smart Buddies		
Tuesday	14 Feb 2023		Malaysian Studies	Politics and International Relations							
Wednesday	15 Feb 2023		Adolescent Psychology	Gender Studies							
Thursday	16 Feb 2023		Politics and International Relations	Adolescent Psychology							
Friday	17 Feb 2023		Gender Studies	Malaysian Studies							
Saturday	18 Feb 2023	Activities with i-Smart Buddies and Virtual Tour									
Sunday	19 Feb 2023	Free and Easy									

WEEK TWO

Day	Time	08.00 - 09.00	9.00 - 10.00	10.00 - 11.00	11.00 - 11.30	11.30 - 12.30	12.30 - 01.30	13.30 - 14.30	14.30 - 15.30	15.30 - 16.30	16.30 - 17.30
Monday	20 Feb 2023	Breakfast	Politics and International Relations		Break	Adolescent Psychology		Lunch	Virtual Activities with i-Smart Buddies		
Tuesday	21 Feb 2023		Malaysian Studies	Politics and International Relations							
Wednesday	22 Feb 2023		Adolescent Psychology	Gender Studies							
Thursday	23 Feb 2023		Politics and International Relations	Adolescent Psychology							
Friday	24 Feb 2023		Gender Studies	Malaysian Studies							
Saturday	25 Feb 2023	Virtual Tour to Melaka Historical City									
Sunday	26 Feb 2023	Free and Easy									

WEEK THREE

Day	Time	08.00 - 09.00	9.00 - 10.00	10.00 - 11.00	11.00 - 11.30	11.30 - 12.30	12.30 - 01.30	13.30 - 14.30	14.30 - 15.30	15.30 - 16.30	16.30 - 17.30
Monday	27 Feb 2023	Breakfast	Malaysian Studies		Break	Politics and International Relations		Lunch	Virtual Activities with i-Smart Buddies		
Tuesday	28 Feb 2023		Adolescent Psychology	Gender Studies							
Wednesday	01 Mar 2023		Politics and International Relations	Adolescent Psychology							
Thursday	02 Mar 2023		Gender Studies	Malaysian Studies							
Friday	03 Mar 2023		Examination			Examination			Closing Ceremony and Performances		
Saturday	04 Mar 2023	Free and Easy									
Sunday	05 Mar 2023	Free and Easy									

(2)授業科目

Malaysian Studies

各授業の前半ではマレーシアの歴史、民族、伝統、宗教、行事などを、後半ではマレーシアの公用語であるマレー語を学んだ。マレーシアが多民族国家である理由や、民族ごとの文化について学ぶことができ、とても興味深い授業だった。また、バディと協力して行う課題も出されたため交流のきっかけにもなり、授業を通して仲を深められたと感じる。

Politics and International Relations

三十年戦争から冷戦終了後の国際化までの世界史を広く紹介しつつ、各時代の思想家や主義についても紹介された。各授業の終わりには議論時間が設けられ、当日の授業で学んだ内容や自らの意見を共有する機会があった。小テストは期間中3回実施され、2～3回分の授業の内容を確認するものであった。世界史の知識があればより理解しやすいが、事前知識がなくとも専門用語を学ぶ良い契機となり、程よい難易度の科目であったと感じた。

Adolescence Psychology

思春期の心理的発達に加え、思春期に問題になりがちな精神的問題や家族問題まで、幅広く基本的な知識を学ぶことができる授業であった。非常に学生のことを考えて下さる教員の方で、課題提出のメールに丁寧に返信して下さるなど、一人一人への対応がとても手厚かった。授業外でもたびたび関わることもあり、日本の大学ではあまり考えられない程先生と深く関わることができたように思う。

Gender Studies

この授業は週2回、主に講義形式での実施だった。グループで決められたテーマについてプレゼンテーションを行う機会が1回と、最後に授業内でディスカッションした内容に即したテストが行われた。プレゼンテーションのテーマはジェンダーの新鮮な概念に関するものでかなり難しく、さらに先生が何度も質問をするため、かなり難易度は高かった。授業内容は主にジェンダーの概念や「男らしさ」について学ぶものであった。韓国のボーイズラブドラマを見るという課題もあり、難しいながらもユニークな授業を楽しむことができる。新たな価値観や考え、知識を習得することができる授業であった。

(3) アクティビティとセレモニー

Program Briefing and Campus Tour

プログラム初日は授業はなく、オリエンテーションとキャンパスツアーが行われた。オリエンテーションは SoSHIP に現地で参加している他大学の学生や、SoSHIP 以外のプログラムに参加している学生と合同で行われ、現地バディの挨拶、各プログラムの概要、現地滞在において注意すべき点の説明があった。また、現地で参加している学生はこの場で各バディとの顔合わせの機会が設けられた。

オリエンテーション後に行われたキャンパスツアーでは、マラヤ大学のキャンパスや施設についての紹介があり、バディが写真や動画を用いて 1 時間ほど説明をしてくれた。

なお、プログラムのスケジュールには ELPT (English Language Proficiency Test; クラス決めのためのプレースメントテスト) の記載があるが、オンラインの学生は受験の必要がなかった。

Activities with I-Smart Buddies or Tutorial Sessions

日程表には、平日の午後に毎日アクティビティが設けられているように記載があるが、実際には週 3 日、火・木・土曜日に約 1 時間半のアクティビティが行われた。開始・終了時間は日によって多少のばらつきがあったものの、平日は日本時間で 16:00～17:30

に、土曜は 12:00～14:00 の間で 1 時間程度行われることが多かった。Virtual Activity には基本的に全員が参加していたが、アルバイト等の事情がある場合は欠席や途中退室が許された。

Virtual Activity の企画・進行は全て現地のバディによって行われた。内容は主にマレーシアの観光名所の写真や動画をスライドで紹介した後、Web 上のゲームやクイズを全員で一緒に行うというものが多かったが、午前中の授業の課題で映画鑑賞が出された際には課題の映画を一緒に観たり、日本の食べ物や観光名所、東北大学について我々が発表する機会が設けられたりと、内容は日によって様々であった。

授業時間内でバディと交流できる機会はほとんどなかったため、Virtual Activity はバディと直接会話することができる良い機会であった。アクティビティ内では、バディが積極的に質問を投げかけて発言しやすい環境を作ってくれたため、終始リラックスした雰囲気であった。

Closing Ceremony

Closing Ceremony は最終週の金曜日に、日本時間の 16:00～19:00 に行われた。本式典はオリエンテーションと同様に、SoSHIP 以外のプログラムと合同で開催され、先生やバディの代表者、学生代表のスピーチや、修了書授与、現地でプログラムに参加した

学生によるマレーシアの伝統楽器の演奏やダンスの発表が行われた。また式の最後には、バディが我々のために作成してくれたビデオを鑑賞した。

3.プログラムのハイライト

専門的な知識を分かりやすく説明するということ

医学部3年 鈴木穂香

今回の SoSHIP では、4つの授業を受けたが、どの授業も自分がこれまで習ったことのない内容であり、毎回の授業で新たな発見や学びがあった。その中で私がこのプログラムにおいて特に印象に残っている場面は、Adolescence Psychology の授業の中で「menstrual cycle」、「libido」という単語の意味について先生に質問された場面である。私が看護学専攻ということもあり、授業中にこの単語が出てきた時に「この単語の意味を説明してみて」と先生が私に声を掛けた。

このように専門用語を理解し、それを英語で分かりやすく説明するということは、私の目標である「英語でもコミュニケーションが取れる助産師」になるために必要不可欠な能力である。例えば、日本語が分からない妊婦に「morning sickness（つわり）」にどのような症状があるのか、などと英語で質問されたら、まず、その単語を理解し、症状について分かりやすい英単語を選んで適切な文法で繋ぎ、説明する必要がある。実際にそのような妊婦とコミュニケーションをとってはいないものの、専門用語を理解して、それを自分の言葉で説明するという状況を SoSHIP のプログラムにおいて経験できたことは、自分にとって非常に意味のあることだった。自分の知っている単語と運用できる文法を用いてどのように分かりやすく説明するか、ということは非常に難しかった

が、自分の医療用語に関する語彙力や自分の運用できる文法力を知ることができ、目標達成のための課題がみえた良い機会であった。

現地バディとの交流

農学部 2 年 津田太朗

本プログラムの特徴のひとつとして、現地バディによる親身なサポートが挙げられる。SoSHIP では日本人学生 2 人に対して現地バディが 1 人つくシステムになっており、プログラム開始の数日前に担当バディの SNS の連絡先などがメールで伝えられる。バディはマラヤ大学の学生で、Program Briefing と Closing Ceremony、 Virtual Activities の企画・運営だけではなく、我々が受ける授業にも一緒に参加してくれる。そのため、プログラムのスケジュールだけでなく、授業内容に関しても気軽に質問することができる。

マレーシアの公用語はマレー語であり、バディは我々と同様に英語を第 2 言語とするノンネイティブであるため、英語を話すスピードは比較的遅く聞き取りやすい。また、我々も文法や発音の正確性を過剰に意識することなく会話することができ、英語力にあまり自信がなくても比較的参加しやすいプログラムであるといえる。さらに彼らは皆明るく社交的な性格で、授業開始前後の時間にはオンラインの学生に対して話しかけてくれることも多く、プログラムにおける彼らの存在は非常に大きかった。

また、彼らとの交流を通じてマレーシアの人々の文化や国民性も垣間見ることができた。多民族国家であるマレーシアには様々な人種や宗教が共存しており、バディにもマレー系、中国系、インド系の学生がいた。文化の違いに関して私の印象に残っているのは、午後の Virtual Activities でお互いの国の食べ物について紹介したときに、私が「日本では日本酒、中国では紹興酒など、それぞれの国にはその地域特有のお酒があることが多いが、マレーシアはどうか？」と尋ねると、「マレーシアは国教がイスラム教で、イスラム教では飲酒が禁じられているため、マレーシア独自のお酒はない」と返答されたことである。この体験を通じて、無宗教者の多い日本ではあまり見られない宗教と国の文化・生活のつながりを知ることができた。

このように本プログラムにおけるバディは、オンライン留学という制約の多い環境の中で手厚いサポートを提供してくれるだけでなく、英語力の向上、ひいてはマレーシアについて知るきっかけをもたらしてくれる大変貴重な存在であった。

日本視点と海外視点の比較

文学部1年 溝口莉子

今回 SoSHIP に参加して、興味深かった授業として Gender Studies という授業をあげる。この授業では、プレゼンテーションやディスカッション、またドラマや映画の鑑

賞を通して「ジェンダーとはなにか」、「男（女）とはなにか」、また「“masculinity”

『男らしさ』とはどのようなものか」などについて学んだ。

私は、後期の授業でジェンダーについて学んでおり、日本とマレーシアの両方の視点からジェンダーについて学ぶことができた。日本のジェンダーの授業は「男女平等」の社会を作るためになされてきた取り組みや歴史などを学び、主に女性の視点から社会を見るものだった。一方マレーシアの授業では、主に男性のジェンダーについて考えることが多かったり、女性の立場が低いことが問題にされることもあったが「男女平等」を目指すと言ったことはあまり耳にしなかったりと、日本のジェンダー問題に対する焦点の当て方と異なっていることがわかった。また、マレーシアの授業では、日本では扱うことに抵抗があるレイプなどの性暴力、性犯罪の問題に切り込んでいたり、ドラマ・映画鑑賞の課題ではボーイズラブの作品が課題作品とされたりと、日本との性に対する意識の違いなどが強く感じられた。

これらの違いを感じたことで、特に国際的な問題となっている事柄は日本からの視点だけでなく、いろいろな国の視点からその国の成立背景や現在の状況などさまざまな要素を加味し、柔軟に見ていくことが重要なのだと改めて気づかされた。

英語を話すことへの意識の変化

法学部1年 大泉結

私の研修中のハイライトとして、英語を話すことを純粋に楽しむことができるようになった瞬間を挙げる。プログラムに参加する以前は、オンライン英会話を通しての英会話の経験は少しあったが、自分の能力は不十分だと感じていたため英語を話すことに未だ不安を感じていた。うまく伝えられるかどうか、何も話せなかったらなどと考えすぎてしまい、英語を話すにあたってストレスを感じざるをえなかった。このオンラインプログラムにおいても、授業の中では意見を求められる場が多くあり、初めのうちはかなり不安を感じていた。しかしある活動を通じて、英語を話すことへの意識が変化した瞬間が訪れた。それは授業後にバディと行うアクティビティである。

週3回授業後に行うアクティビティでは、現地のバディが毎回企画を用意してくれており、オンラインで参加している私たちも、現地参加している方と同じように楽しめるよう様々な工夫をこらしてくれた。マレーシアの文化や観光地をたくさんの写真で紹介してくれたり、マラヤ大学のキャンパスツアーをバーチャルで行ってくれたりもした。そんなアクティビティの中でとくに英語への意識を変えてくれた活動は、バディと行った数々のゲームである。絵を描いて何を描いたのか当てるゲームや、自分にまつわるクイズを自作して出題するゲームなど、毎回楽しめる企画を準備してくれていた。そのゲームの中で私は文法や発音等をほとんど気にしておらず、とっさに出た単語でしかコミ

ユニケーションしていなかったと思う。そこで初めて、英語はあくまでツールの一つにすぎず、そのツールを使って楽しむことが何よりも大切であるということに気付かされた。正しく英語を話すことよりも、英語を使って楽しむ・伝えることに意識を置くことが出来た結果であると思う。私はもともと英語が好きで英会話を始めていたのであり、それを忘れてはいけないと改めて思うことが出来た瞬間であった。

異なる視点からの歴史観と議論

法学部 1 年 工藤晴斐

私がハイライトとして挙げたい活動は、Politics and International Relationships という授業である。近現代世界史をテーマとしており、政治思想や主義を組み合わせることで多面的に世界史を捉えなおすことを狙いとしている授業であった。世界史を以前から学んでいた私としては、「マレーシア視点からの」世界史を改めて学びなおすことが出来たことが大変新鮮かつ有意義であったと感じている。この授業の特徴的な点として、マレーシアの被植民地時代に対する評価、講義と演習の授業を折半したような授業形態、の 2 つを挙げたい。

前者は帝国主義の説明の際に感じたものであるが、日本の授業や教科書では見ることのない挿絵（原住民を虐殺する英国人と抵抗する原住民の姿が描かれている）を有名なものとして取り上げた点、および自らを帝国主義に対する被害者や抵抗者であることを

紹介した点が、日本の教育では特段取り上げられることのなかった、当事国視点での歴史観の表れであると感じた。このような違いを感じる機会は留学先の授業を受けなければ得られないものであり、大変貴重な機会であったと考えている。

後者については、講義の終了前約 10 分間を議論の時間に充てるという点が特徴的であった。理想主義と現実主義の立場から互いを批判するもの、30 年戦争や WW1 が国際関係にもたらした影響、ヴェルサイユ条約の適切性などが題材となったが、いずれも自らの意見を発信する良い機会となった。ヴェルサイユ条約の適切性についての議論が特に記憶に残っており、同条約が厳しすぎるという立場からの「WW2 はこの条約によるドイツの復讐心によるもの」という指摘に対して私が「この条約以上に世界恐慌の影響が大きい」と反論した。その後先生が私の立場に賛同し、「条約が厳しいものであるか否かによらず WW2 が発生していたか」の議論に発展したことが非常に面白い体験であった。学部 1 年の私としては議論主体の授業をそれほど経験しておらず、このような議論を英語を用いて、海外の教員からの視点を参考に行えたことは大変貴重な成果であったと考えている。

他国を知ることで見えた日本

農学部 1 年 佐藤優希

本プログラムでは、Malaysian Studies の授業と放課後の Virtual Activity の時間で、マレーシアについて学ぶことができた。Malaysian Studies では、担当の先生から各授業のテーマについて民族ごとの文化の説明がなされた。Virtual Activity ではバディの一人が、観光名所を紹介しながらその歴史的背景についても説明してくれた。これらを通してマレーシアについてよく理解でき、マレーシアに是非行きたいと感じるようになった。

その一方でこれらは、私たちが住む日本について考えるきっかけにもなった。私は海外に行ったことがないこともあり、今までは日本の文化について客観的に考えたことがなかった。しかし、マレーシアの文化を知ると、そのことについて日本ではどうだろうかと考えるようになり、日本の文化についてより深く考えることができるようになった。例えばマレーシアに昔からある文学についての紹介があった時には、日本では何が当てはまるか考え、最も古いものであれば『竹取物語』、広く現代においても親しまれているものであれば『日本昔ばなし』だろうと思った。またマレーシアのお祭りについて学んだ時、マレーシアではマレー系、インド系、中国系、少数民族など、それぞれが受け継いできたお祭りが行われていると知った。この視点から日本について見てみると、日本にも地域ごとにその土地の神様を称えるお祭りがあることに気が付き、身の回りにも色々な信仰が潜在していると実感した。

これらの日本の文化に対する気づきは、マレーシアという自分とは異なる文化に触れることによって得られたものである。他の文化を知ると同時に自分の文化のことも知ることができるというのが、非常に面白い体験であった。

授業形式とジェンダー問題

農学部 1 年 鈴木彩伽

今回の SoSHIP では 4 つの授業を受けた。その中で私が最も印象に残ったのは Gender Studies の授業である。他の 3 つの授業は、事前にスライドが用意されており、それに合わせて先生が講義していく、という流れだった。しかしこの授業はまず学生が発表し、その内容の補足や先生自身の考えを、その場で先生が述べていくという流れであった。私が受けてきた日本の授業では、当たり障りのない事実や、科学的に正しいとされる事実しか教えない傾向にあると感じる。しかし、この Gender Studies の授業では、事前にスライドが用意されていないことも影響してか、先生のジェンダーに関する考えが授業に大きく反映されており、印象的であった。またテスト問題においても、選択肢のいずれも正解ではと思う問題があり迷った末に、どちらも回答欄に書くことがあった。

この授業での学びは、先生の意見がすべて正しいわけではなく、現地学生もそうは思っていないさそうであること、そして、ものごとに対する意見の違いがある状況であっても、仲良くなる事が出来るということの二つである。「先生の意見や教科書の内容が

絶対ではない」という表現は今まで何回か聞いたことがあったが、これほどまでにこのセリフの意味を実感する状況は初めてであった。また、現地で学ぶ日本人学生が Gender Studies の先生にスズキ(魚)をおごってもらったと聞き、授業で意見が食い違っていたとしても、学生思いの優しい先生なのだなと感じた。授業内容以外にも、非常に学びの多い、印象的な授業であった。

4.研修体験・成果

SoSHIP を通して「自分」を知る

医学部3年 鈴木穂香

今回のプログラムにおいて、自分にとって意味のあったことは主に2つある。1つ目は、英語の4技能の中でも自分の Speaking 能力、Listening 能力に関する課題を知り、それに対する対処方法を考えることが出来たことである。私は、これまで Speaking と Listening に苦手意識があったが、具体的にどのような課題があるのか、ということは明確化できていなかった。そこで、このプログラムでは、この2つの技能に関して自分の課題を明確化するということが自分の中の目標の1つであった。

Listening と Speaking に関して、共通に感じた課題は「語彙力のなさ」である。特に、Politics & IR の授業では、政治や国際関係で用いられる単語を聞き、理解するのに時間がかかった。さらに、歴史を学ぶこと自体が中学生以来であり、事前知識も乏しく、聞こえてきた単語を推測することも難しかった。このような課題に対して、私は事前に政治や国際関係で使われる英単語を調べることで対処しようと試みた。その結果、授業を受ける中で事前に学んだ英単語が聞き取れた時は素直に嬉しかった。このように、自分の課題を知り、対処方法を考え、それが自分の学びに活かされるという経験は自分にとって非常に意味のあるものだった。

そして、Speaking に関しては、完璧な文法と英単語で話さなければならないという「完璧主義」の考え方が Speaking 能力の向上を妨げていたということが分かった。今回のプログラムでは、現地の学生もオンラインの学生も文法や英単語の正解にとらわれるのではなく、自分の知っている文法や英単語を用いて、ジェスチャーや表情を使いながら一生懸命に自分の意見を相手に伝えていた。このような場面をみて、間違いを気にするのではなく、自分の運用できる英語で「伝えようとする姿勢」がコミュニケーションをとるためには重要であるということに気付くことが出来た。このことを実感している中で、自分の中で英語を話すということへの抵抗感が徐々になくなり、以前と比べると自分の失敗を恐れず、積極的に英語を話そうとする姿勢が身に付いたと感じている。そして、そのような姿勢でバディとの会話や授業に臨むことができたことは自分にとって意味のある経験だった。

2つ目は、日本とマレーシアにおける民族、宗教などの違いに触れることができたことである。Malaysian Studies という授業やバディとの交流の中で、マレーシアの文化、宗教、生活習慣等を学ぶ機会があったが、その中でマレーシアでは、マレー系、中国系、インド系と少数民族等が存在し、イスラム教、仏教、ヒンドゥー教、キリスト教といった様々な宗教を持つ人々が共存しているということを知った。このように、日本とは異なり、多様な民族、宗教を持つ人々がお互いを受容しながら、同じ国で共に生活しているということに驚いた。同時に、日本では多様な民族や宗教に触れる機会が少ないため

に、自分が多様な民族や宗教、文化等に対して固定観念を抱いていたのではないかと気付くことが出来た。その民族や宗教の持つ伝統的な行事や習慣の意味を知らなければ、その場面に遭遇した際に自分の国とは違うというだけで、それらに対して寛容になることが出来ないかもしれない。私の将来の夢は、英語で外国人妊産婦のケアもできる助産師になることである。その外国人妊産婦の民族や宗教の違いに対して寛容になり、それらを踏まえた適切なケアを行うためには、まずは自分が多様な民族や宗教等を「知る」ということが大前提であるということに気付くことが出来た。そして、今回のプログラムだけでなく、今後も多様な考え方に触れ、知り、理解していくために、大学の国際関係の企画等にも積極的に参加していこうという意欲にも繋がった。

このプログラムを振り返ると、参加当初には予想していなかった学びや気づきが沢山あり、濃密な3週間であったと考える。今回のプログラムで得た成果を今後の英語の学習に活かしていきたい。

知識・経験の獲得と心理的側面での成長

農学部2年 津田太朗

オンライン留学と聞いて、皆さんはどんなことを想像するだろうか。画面上で授業を受けるだけでは得るものは少ないという意見や、実際に現地に行かなければ留学する意味がないといった否定的な意見を挙げる人は多いだろう。実を言えば私も、本プログラ

ムに参加する前は少なからず同じ気持ちを抱いていた。しかし、本プログラムでの経験を通じて、私のオンライン留学に対する見解は大きく変わっていった。

本プログラムの特徴の一つとして、授業科目が全て国際関係や人文社会科学関連、いわゆる文系科目であることが挙げられる。理系が専門である自分にとって、これらの科目は日頃全く馴染みのないもので、正直に言えばあまり興味の湧かないものであった。しかし実際に授業を受けると、これらの科目に対する自分の見方は大きく変化していった。

数ある授業の中で最も印象的だったのが、Gender Studies の授業である。この授業では、「ジェンダーとは何か」を捉えなおすとともに、そこから派生する「男らしさ」や性暴力等の犯罪、さらには大学が性自認をどのように制度化・規制しているかなど、多岐に及ぶジェンダー問題について学んだ。授業内容はかなり発展的で、先生が「私の使う用語の中には、私が考え出してまだ公に発表していないものがあるので、それについて口外しないでほしい」と学生に釘を打つほどであった。そのため、先生の話す内容はそのスピードの遅さにも拘らず、単語や内容の難しさと理解に時間を要することが多々あり、「英語“を”学ぶ」と「英語“で”学ぶ」ことの違いと難しさを改めて感じた。宿題では韓国のボーイズラブの映画を観たり、プレゼンテーションのトピックとして自分の大学の性的マイノリティへの取り組みを調査したりすることで、今まで自分がジェンダー問題についていかに浅い知識しか持ち合わせていなかったかを自覚することが

できた。Gender Studies の授業に留まらず、本プログラムの授業を通じて得た知識や経験はどれも新鮮で、自分の知見を深めるよい機会になった。

本プログラムへの参加は、先に述べた知識や経験だけではなく、人間的な側面での成長も自分にもたらした。私はかねてより、ネガティブな感情が表情や行動に出てしまうことに引け目を感じていた。しかし本プログラムで出会ったマレーシアの先生方や現地バディ達は常に笑顔を絶やさず、いつも陽気に振る舞っていた。いつでも人を楽しませようとする彼らの姿勢に自分は感化され、自分自身を見直そうというきっかけとなった。このように、他国の人々との交流、特に英語圏以外の人々との交流の機会を日本で気軽に得られたというのは、このオンライン留学ならではのメリットであると感じた。さらに、zoom での授業参加という制約の多い環境の中でも、現地の先生やバディのサポートのおかげで積極的に発言をすることができた。オンラインという、現地参加と比較するとディスアドバンテージがある中でも積極性を持てたことに関しては、自分の成長を感じられた点であった。この体験を通じて、オンライン留学のデメリットも見方を変えれば自分にプラスに働くメリットになりうるという気づきも得ることができた。

この3週間のプログラムを通して、知識や経験的な側面と心理的な側面の両面において自分をステップアップさせられたように思う。このようなかけがえのない機会を与えてくれた全ての人に感謝するとともに、この3週間で得たことを自分の成長の糧にし、さらなる高みを目指して努力を続けていきたい。

迷ったらまずチャレンジを

文学部 1 年 溝口莉子

私は今まで、漠然と「大学生になったら留学をしたい」と考えていた。しかし、留学をするためにはなにをすべきなのかなど何も分からず、ただ留学説明会に参加して留学に行きたいという気持ちを高めるばかりであった。そんなときに今回参加した SoSHIP を見つけた。SoSHIP ならば、日本にいながら海外の授業を受けることができるし、毎日英語に触れることができ、費用もそれほどかからない。さらに、私は留学をするならばたくさんの文化に触れることのできる場所で、自分の知見を大いに広げたいと考えていたため、多民族国家として知られるマレーシアのマラヤ大学に留学できるということもこのプログラムに参加する大きな決め手となった。以下では、プログラムに参加して私が得た成果を 3 つあげたいと思う。

1 つ目は、英語は完璧なものでなくていいということである。英語は自分の意見を伝える、コミュニケーションの手段にすぎない。英語を完璧にすることを求めすぎると、自分の英語に自信を持てず、発言できなくなってしまう。実際に私もそうであった。英語を完璧に話すことを目指しすぎると、コミュニケーションをとることが疎かになってしまう。どんなに拙い英語でも伝える姿勢が大事なのだ。みんな自分の意見を聞こうとしてくれるし、意見を聞きたがっている。「適当に自信をもって英語を話すこと」を大切にすべきなのだと強く感じた。

2つ目は、自分の意見を持つことが重要ということである。SoSHIP では受けたほとんどの授業で、意見を求められた。Politics and International Relations の授業では、「ヴェルサイユ条約はドイツにとって過酷すぎるものだったか」や「もし第一次世界大戦後の対応が変わっていたら第二次世界大戦は起こらなかっただろうか」というような、今まで考えたことのないような問いを投げかけられた。日本の大学の授業では、授業中に問いを出されても、意見を求められることは少ない。しかし、SoSHIP では学生ひとりひとりの意見を聞き、それに先生が答えるという時間が多く取られていると感じた。自分の意見を持ち、みんなの意見を聞くことで自分の考えをアップデートする、受け身で授業を受けるのではなく、積極性を持って授業に参加する、そのような姿勢によって、その授業の内容をより深く理解することができるのではないだろうか。

3つ目は、悩んだらまずチャレンジをすべきだということである。留学をするのにも現地に行くのはハードルが高いが、オンラインならばそのハードルがグッと下がる。オンラインであっても、現地と同じ授業を受けることができるし、バディとの交流を通して文化面での交流もできる。参加することを迷っているならば、参加して損はないプログラムであるため、ぜひ参加してほしいと思う。また、私は今回、英語力に自信がなく、自分の言いたいことを英語で伝える自信もなかったために、発言することをかなり躊躇ってしまっていた。プログラムが終わった今、私はそのことをかなり後悔している。英語を使用する機会しかなかったのに、それを自分で潰してしまっていた。意見を求めら

れたらもっと積極的に発言し、もっとバディたちとたくさん会話をしていれば良かったと後悔している。留学を考えているみなさんにはぜひ積極的に、自信を持って英語を使ってほしいと思う。チャレンジすることが最も大切である。

私は、SoSHIPに参加することができて本当によかったと思っている。忙しい春休みにはなるが、それ以上の収穫を得られる有意義な時間を過ごすことができた。また、オンラインで参加したことで現地に行って留学をしたいという気持ちがかかなり高まったため、英語の勉強に今まで以上に励み、必ず現地で留学をしたいと思う。

現地留学と変わらない成果

法学部1年 大泉結

このオンライン留学プログラムで得た成果は、主に3つある。まず1つ目は、英語で学ぶ経験ができたことである。私は将来交換留学をしたいと考えており、交換留学の準備段階として短期留学をしたいと思っていた。当初私は現地の短期留学に行かなければ意味がないと思っており、現地へ行く留学を強く希望していたが、費用面の問題で叶えることができなかった。そこでオンライン留学に参加したのだが、私は現地派遣とほぼ同じレベルの経験ができたと感じている。英語で専門知識を学ぶのが交換留学であるが、それと同じ経験がこのプログラムを通じて可能であった。英語を話す、聞くのと同時に、

英語で学ぶ機会は日常生活では限られている。本プログラムでは、オンライン上でも十分に英語で学ぶ経験を得ることができた。

次に挙げるのは、自分の意見を持つことの大切さに気が付いたことである。プログラムでの授業では、頻繁に個人の意見を求められる。もちろんそれぞれの意見は否定されることはなく、学生から出た意見を軸として授業が進んでいくこともある。このことから、いかにトピックに対して意見を持つことが重要視されているかがわかる。ここで私が実際に経験したことを共有したい。私たち日本人学生は英語の能力が不十分な上、日本語ですら答えるのが難しいようなトピックを与えられる場合もあるため、授業内で意見を求められた際にとっさに応えられない時も何度かあった。しかしそのような場合に、「大丈夫、意見がないのね」と先生方はおっしゃっていた。そこで私が気付いたのは、「意見がない」ことも意見であるということである。ただ、ここでは意見がないことを明確に示すことも同時に必要である。今まで考えたことがなかった、または自分にとって新しい視点だった、などと伝えると良いことも新たな発見であった。日本では質問等を投げかけられた際に答えることができない場合、あまりいいイメージでは見られないように感じる。しかし自分の考えが正しいか正しくないか、そもそも考えがあるのかなのかをはっきり相手に伝えることが最も重要であるという気づきを得た。

最後に挙げる成果は、積極性がついたことである。プログラムに参加する前、私は積極性があるとはいえなかった。しかしプログラムの授業やアクティビティを通して、積

極的に行動する経験を積み、抵抗なく行動できるようになったと実感している。授業では意見を求められる機会が何度もあり、さらに難しいトピック、オンライン上、英語でのコミュニケーションとなると、私にとってはかなりハードルが高いもので、毎回ストレスを感じざるを得なかった。しかしそれを何度も繰り返すと、話し始めるのをためらっていた自分が、自ら会話に入るようになっていたり、失敗を恐れなくなったりしていった。さらに授業後のアクティビティでは、バディとゲームを通じて日常会話をする機会もあった。楽しみながら積極的な会話を練習することができた。総じて、今回のプログラム内容は私にとってはこれまでの経験の中で最も高いハードルであったから、この高いハードルを経験したことにより、日本語でのディスカッションはもちろん、オンラインという授業形式やトピックの難易度に関わらず、すべての積極的な発言に対するハードルが格段に下がった。かつてのコンフォートゾーンを抜け出し、その範囲を拡大することによって積極性を獲得できたことが大きな成果である。

オンライン留学から得られる成果について、当初はかなり不安があった。しかし振り返ってみると、かなり充実した経験を得ることができ、現地での留学とほぼ変わらない成果を得たのではないかと感じている。自分を成長させる、濃い3週間を過ごすことができた。

長期留学に向けた成長

法学部一年 工藤晴斐

私にとってこのプログラムは、この先の長期留学を見据えたものであった。長期留学を前に何をすることが求められるかを考えた上で、海外の講義の形式、異文化社会、日常会話で使用される口語表現に慣れることが重要であると思い至った。そこでこれらの目的にかなうものであり、自らの能力を長期留学に向けて鍛え上げる一助となるであろうこのマラヤ大学 SoSHIP プログラムへの参加を決意した。以下では私のオンライン留学の体験、成果の中で特に長期留学に向けて役立ったものを示していきたい。

第一は口語表現、専門用語の理解である。口語表現についてはバディである Hao さんの英語能力が自分以上だったこともあり、日常会話の中でも様々な口語表現を知ることが出来た。口語表現は現地での経験でなければ身に着けることが出来ないのではないか、というのがプログラム参加前の私の予想であったが、ZOOM を使って課題と一緒に解く際や、LINE での日常会話の中で十分口語表現を身に着けることが出来た。例を挙げると、“hahahshs”といった表現が文面での笑いを表現していることは一切知らなかったのだが、自身も会話の中で使用する中で自然に用いることが出来るようになった。専門用語については、長期留学となれば最初の壁となるものであると考えていたため、このプログラムでレジュメレベルの専門用語を理解しながら授業を受けたことは有意義な経験であったと考える。自身が専攻する政治分野の講義において

も専門用語が多かったものの、事前知識があったために理解はさほど難しいものではなかったという経験から、日本語での事前知識を蓄積することの重要性を再認識することが出来た。

第二はマレーシア視点の世界史とマレーシアの多文化共存政策に対する理解である。前者はプログラムのハイライトの欄で述べているため省略する。後者はマレーシア研究の講義で実感することが出来た点であるが、各民族、各宗教への言及がいずれも平等であった点が印象的であった。マレー系・インド系・中国系・Iban や Kadazan といった少数民族の紹介、イスラム教・ヒンドゥー教・キリスト教・仏教の紹介それぞれが文化、建造物ともに様々なされていた。注目したい点は、優劣をつけるような点が全く見受けられず、それぞれが尊重されていたことである。これは一見当然のようにも見えるが、かつてのマレー系優遇政策の下では行われていないであろう教育内容であるように私は感じた。多文化社会であるマレーシアにおける多文化共存政策が教育の現場に現れた実例であり、このような実情を知ることは日本に住む中では難しいため、長期留学での異文化接触に先立って大変有意義であったと考える。

第三は積極的な意見発信とバディと協力しての課題提出である。前者はこのプログラムにおける授業の中で議論の機会が多く設けられたことによるものであり、英語を用いて意見を積極的に述べる事が出来たことは、長期留学に向けて自らの自信に大きくつながった。プログラム参加前は英語という形での意見発信の機会はほとんどな

く、ある程度の不安があったが、各講義における議論の機会の多さ、また質問がないかの頻繁な確認があったために、自信をもって英語での意見発信を行うことが出来た。後者のボディとの課題提出は、自らの課題を再確認することが出来たという点において役立ったと考えている。課題に取り組む中で感じたことは、自身が辞書を用いて英単語を調べる回数の多さであった。また、自身が思い至るまで時間を要したもののボディの Hao さんがスラスラと用いることが出来る単語の多さにも気づき、語彙力のさらなる増強が長期留学に向けて必須であることを自覚できた。この気づきは3週間という長い期間英語のみで授業を受けた中で得られたものであり、この先の英語学習の動機にしていきたいと考えている。

まとめとして、全体的にオンライン留学の効果は想像以上のものであったというのが私の感想である。コミュニケーション、知識、積極性、語学といった様々な面において成果を感じる事が出来た。今後は課題である語彙力の不足を、長期留学に向けて法学部の自主ゼミでの国際法学習、および国際交流の機会の活用を通してさらに改善させたい。

興味を行動に

農学部 1 年 佐藤優希

私はもともと留学自体に興味はあったものの、留学を通して何かを身に着けたいというほどの明確な目的もなく、時間的にも部活動より優先したいほどのモチベーションも無かったため、気軽に取り組めるオンライン留学に参加した。実際にプログラムが始まると想像以上に充実しており、あっという間の 3 週間だった。この 3 週間で得られたことのうち 2 つを挙げて述べていきたい。

1 つ目は、英語に対する向き合い方の変化である。以前は完璧に話そうとするあまり、言葉が出てこなかったり伝えたいことを伝えられなかったりすることがほとんどだった。しかし、オンライン留学では文法や発音の正確さよりも、自分の考えをすぐに伝えるようにすることが重要であった。そのため、英語はあくまで意思を伝えコミュニケーションをするための手段であるため、完璧にこだわる必要はないと考えられるようになった。もちろん完璧を目指していくことも重要であるが、完璧を目指すあまりに会話のリズムが切れてしまっは話していて楽しくない。文法的な完璧を目指すのではなく、リズムよく話し意思を伝えるツールとしての英語を上達させていきたいと感じられた。

2 つ目は、異なる文化についての考え方の変化である。日本では異なる文化的背景を持つ人を執拗に区別すると感じているが、多民族国家であるマレーシアでは異なっているということが当たり前であって、尊重されていた。また互いの宗教や価値観について

正しく理解し、善悪の判断によらず対等な立場があることが印象的だった。これらのことから、宗教や人種が自分たちとは異なる人の文化を「異文化」としてひとまとめにしてしまうのではなく、相手の文化についての正しい知識を持ち、配慮しあうことが他の文化を本当に理解するために必要なことであると感じられるようになった。

これらの学びは、自分の中で視野が広がっていくのを実感できたきっかけでもあった。言語と文化に対する考え方の変化は間違いなくこれからの学生生活や人生に変化を与えるだろう。留学プログラムをオンラインで受けるのでは大して学べることはないのではないかと感じるかもしれないが、オンラインでも学べることは十二分にある。他の人も述べているように、バディの手厚いサポートや、一緒に授業を受ける学生同士で刺激し合えることにより、どんどん自分を高めていけるチャンスがあるのだ。少しでも迷ったらぜひ挑戦してほしい。

最後に、私がプログラムを通して学び、楽しみ、成長することができたのは、一緒にオンラインで参加した6人をはじめ、現地で同じ授業を受けた学生たち、バディ、現地の先生方など多くの人のおかげである。関わった全ての人に感謝の気持ちを伝えたい。

英語を使うということ

農学部1年 鈴木彩伽

今回のプログラムでの一番の学びは、英語が言語である、ということである。今まで、

私の中での英語は、テストの点数を上げ、良い GPA を取るための手段でしかなかった。

しかし、この SoSHIP のプログラムの中では、英語は誰かとコミュニケーションを取ったり、自分のまだ知らない文化や出来事、知識を学んだりするための手段であった。何より、英語を学んでいなければ翻訳機を通してしか会話できなかった人たちと、直接自分の言葉で話せることの楽しさを知り、今まで避けてきた英語学習への意欲が高まった。

というのも、私がこのプログラムに応募したきっかけの一つに、春休みの英語学習の気力がない、という消極的な理由があった。英語が実生活で役立つというイメージが湧かなかったため、単語や文法を覚えて点を取る勉強としか思えなかったのだ。しかし、今回のオンライン留学を通して、バディの Instagram のストーリーを読みたい、バディとより仲良くなるためにさらに自分の気持ちを表現できる語彙を増やしたいという思いが高まり、そのために英語を勉強するようになった。

さらに、今回の SoSHIP に関わった学生・先生のほぼ全員がノンネイティブであることも、これからの英語学習の活力となった。マラヤ大学へのオンライン留学・留学を考えている人の中には、英語ネイティブと学ぶことができないことを不安に思う人もいるだろう。しかし、このプログラムでは、異なる母国語や文化をもった人たちが英語を介してコミュニケーションをし、さらにお互いの文化を尊重するという経験が味わえる。また、ノンネイティブでもこれほど英語を話し、書き、聞けるようになるという驚きや、バディの英語学習を垣間見る機会もあり、自分と同じで一から勉強し

てこのレベルまでたどり着けるという事実を目の当たりにすることができた。また、現地のバディや先生に留まらず、同じ日本人学生の英語力も非常に高く、刺激を受けた。

それに加え異文化理解のコツも学ぶことができた。異文化理解と聞くととても難しく感じてしまうが、先生やバディから、相手の母国語を真似してみたり、相手の文化について学び、会話してみたりという、些細なことが大事で、とても嬉しいということを学んだ。

このプログラムの中で、どうしてもオンライン留学だと学べることが少ないと感じたのも事実ではある。しかし、私の様な金銭的に現地への留学が厳しい人や、留学への興味はそこまでないが、一度体験してみたいという人、現地への留学はまだ勇気が出ない人におすすめしたい。マラヤ大学の学生と先生、現地での参加をした大阪公立大学の学生、オンライン参加の東北大学の学生全員がとても優しく、話すことが日本語でも英語でも苦手な私でも、無事に3週間の日程をこなすことができた。本当に楽しく、充実した時間であった。感謝の気持ちと共に、この文を終えたいと思う。